

舟入むつみ園

一 般 養 護



舟入むつみ園は、市内天満川の河岸・公園に隣接した静かなたたずまいにあり、しかも交通至便で広島市立舟入市民病院と隣接し養護ホームとしての環境にめぐまれており、昭和45年（1970年）4月に一般養護及び特別養護の併設施設として開設された。

現在は、平成5年（1993年）度の居住環境等の整備による全面改修により、入園定員100人の一般養護と定員4人のショートステイの施設として、また、送迎方式によるデイサービスも実施している。

所在地：〒730-0844 広島市中区舟入幸町14番11号

（TEL 082-291-1555）

（FAX 082-291-1854）

私の被爆体験

中前 キクエ（八十六歳）



被 爆 地 …… 井口（爆心地より五・〇km）

当時の急性症状 …… 一過性脱毛

家族の死亡 …… なし

現在の症状 …… 高血圧症、変形性関節症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、井口の国民学校五年生でした。私達の時代は夏休みもなく、毎日学校に行つて、畑でサツマイモや麦を育てていました。

朝礼のため、運動場にいる時に原爆が投下され、「ピカッ」と光り「ドン」という音と共に、吹き飛ばされました。先生に、早く防空壕に避難するよう言われ、急いで避難しました。

市内は真^まつ黒^{くろ}い煙^{けむり}がモクモクと上がり、次第^{しだい}に真^まつ赤^かに燃^もえていきました。

そして、黒^{くろ}い粒^{つぶ}の雨^{あめ}が降^ふり出^だしました。家に帰^{かえ}ると建^{たて}具^ぐが壊^{こわ}れ、ガラスも散^ちつていて、それ^{それ}を祖^そ母^ぼが片^{かた}付^づけていました。

原^{げん}爆^{ぱく}投^{とう}下^かの次^{つぎ}の日^ひから、井^{いの}口^{ぐち}の学^{がく}校^{こう}に被^ひ爆^{ぱく}した人^{ひと}が運^うばれてきましました。運^うばれてくる人^{ひと}は皆^{みな}、男^{おとこ}か女^めか分^わからないくらい、ぼろぼろになっっていました。

私^{わたし}達は、毎日運^うばれてきた人^{ひと}を介^{かい}護^ごしました。

最初^{さいしょ}は怖^{こわ}くてしょうがなかったけ



学校の救護所

かろうじて火災からのがれたが、校舎は爆風で半壊、窓や壁に
破損がひどく、負傷者を収容し、原爆被災撮影者の会提供

ど、だんだん慣なれて怖こわくなくなりました。

介かいご護ごをしても、皆みなすぐに死しんでいきました。亡なくなった人は、海うみ辺べに掘ほられた
四よつつの穴あなに入いれられ焼やかれていました。

結けっこん婚こんし、主しゅ人も被ひ爆ばくしていましたが、初はつめめの頃ころは互たがい被ひ爆ばくしていることは、内ない
緒しよにしていました。子こどもができた時ときは、無ぶ事じに生なまれるか心こころ配はいしましたが、丈じようぶ夫ふ
な子こが生なまれた時ときは、安やす心しんしたのを覚おぼえています。

今いまはむつみ園えんに入い園えんして、穏おだやかに生な活かつを送おくることができて感かん謝しゃしています。



八月六日のこと

畠山 知子（八十九歳）



被爆地……（看護被爆）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の症状……二型糖尿病、白内障、両変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、朝会ちようかいの時でした。十四歳さいでした。広島ひろしまから遠く、四十キロも離れた吉田よしだにも、青白あおしろい閃光せんこうが矢やのように走り抜けました。

遙かはる広島ひろしまの空に、大きなキノコ雲ぐもが見えました。その脇わきを一機いっきの飛行機ひこうきが飛び去るとさのが見えました。それがB 29だったのです。

午後から、着衣ちやくいはボロボロ、手の皮のぶら下がった多くの患者かんじやが、何台ものトラッ

クで運ばれて、学校の廊下へむしろを敷いて寝かされました。八月七日からは、その人達の看病に着きました。体中に何か分かりませんが、白い薬が全身に塗ってあって、悪臭が凄かったです。

当時は、夏休みも日曜ありませんでした。冷房はもちろん、扇風機もあります。んでした。ハエを団扇で扇いでも、傷口にハエが卵を産み付け、一晩でそれが大きくなっていました。ウジ虫をピンセットで一匹ずつ取って、瓶へ入れました。又、人の肉が腐っていましたから、悪臭が鼻について弁当も食べられないくらいでした。救急袋は、毎日身に着けて通学しました。袋へは、三角巾と止血棒（二十センチ位の棒）、非常食として大豆を炒ったものを入れていました。それに、綿入りの防汚頭巾が必需品でした。

「水をくれ水をくれ。」と叫ばれても、「水を飲ませたら死んでしまうから。」ときつく言われていましたので、それが思い残しでもあり一番辛かったです。医薬品と医師が足りないのです、毎日死人が何人も出ました。

学校の裏山へ大きな穴を掘って、そこが急場の焼き場でした。昼夜なく煙の絶えることはありませんでした。

合掌、南無阿弥陀仏
がっしょう なむあみだぶつ

あゝの閃光あゝのキノコ雲永遠に忘れず
いくまん みたましす げんばくひ
幾万の御霊鎮まる原爆碑
せんこう ぐもえいえん わす



市立第一国民救護所

かろうじて火災からのがれたが、校舎は爆風で半壊、窓や壁に
むしろをおおい、負傷者を収容した。

(陸軍船舶司令部写真班撮影／広島原爆被災撮影者の会提供)



原爆と私の人生

原 恵美子（八十九歳）



被 爆 地 …… 段原東浦町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… （当時）なし

現在の症状 …… 骨粗鬆症、皮脂欠乏症

被爆時の状況及びその後の生活

忘れ^{わす}た^くても、私の脳裏^{のうり}にはびつしりと辛い思い^{つら}い出^でとして残留^{ざんりゅう}しています。

私は当時^{とうじ}、旧制高女^{きゅうせいこうじょ}の2年生^{にせうせい}十三歳^{さい}でした。

連日^{れんじつ}の勤勞奉仕^{きんろうほうし}、建物疎開^{たてものそかい}、専売公社^{せんばいこうしゃ}、被服廠^{ひふくしょう}と、色々^{いろいろ}と重労働^{じゅうろうどう}の日々^{ひび}が続きま

した。毎日^{まいにち}、炎天下^{えんてんか}のもと、鉢巻^{はちまき}一本^{いっぽん}で作業^{さぎょう}していましたが、遂^{つい}に私は病^{やまい}に倒^{たお}れ

意識^{いしき}不明^{ふめい}にな^いっておりました。「入院^{にゅういん}させても、連日^{れんじつ}の空襲^{くうしゅう}では何^{いず}れにしても助^{たす}から

ない。毎日^{まいにち}往診^{おうしん}に來^きますから。」と言^いわれ、お医者様^しの指示^{しじ}通^{とお}りに過^すごしておりました。

その時、凄^{すこ}い閃光^{せんこう}とともに家屋^{かおく}を土台^{どだい}から揺^ゆすられ、家具^{かぐ}は倒^{たお}れ外^{そと}に出ることさえできない状態^{じょうたい}になりました。一瞬^{いつしゆん}真^まつ暗^{くら}になり、暗黒^{あんこく}の時間が暫^{しばらく}く続きました。もう不安^{ふあん}さえも、感^{かん}じられない状態^{じょうたい}だったと思います。

出口^{でぐち}を作り、外^{そと}に連れ出され、そこには体中^{からだじゅう}火傷^{やけど}の水膨^{みずぶく}れのできた方々^{かたがた}の行列^{ぎょうれつ}で、まるでこの世^よの出来事^{できごと}とは思われませんでした。

午後^ごより、的場^{まとば}町^{ちやう}方面^{ほうめん}から火^ひの手^てが上がり、小さな手押^{てお}し車^{ぐるま}に乗^のせられて、怪我^{けが}人^{にん}だらけの街^{まち}を向洋^{むかいやう}方面^{ほうめん}に避難^{ひなん}いたしました。

「ウチは大野^{おほの}じゃけえ連れて帰^{かえ}つて。」「兵隊^{へいたい}さん水^{みづ}を頂戴^{ちやうだい}。」「今^{いま}も耳^{みみ}から離^{はな}れることは無く、包帯^{ほうたい}だらけの兵隊^{へいたい}さんの痛^{いた}ましい姿^{すがた}は忘^{わす}れることはできません。向洋^{むかいやう}の火葬場^{かそうば}の近くで、一晚^{ひとばん}過^{すご}しました。その夜^よもB29は偵察^{ていさつ}に來^きたようです。

二日後^{にじつご}に段原^{だんばら}の自宅^{じたく}に帰^{かえ}り、爆風^{ばくふう}で飛^とばされた家^{いえ}の中^{うち}は、手^てが付^つけられないような状態^{じょうたい}でした。火傷^{やけど}をなされた方^{かた}は傷口^{きずぐち}にウジがわき、ピンセットで取^とりながらの治療^{ちりやう}は、とても残酷^{ざんこく}で見^みられたものではありません。

最初の登校^{まい}で参^{まゐ}りました場所は、比治山^{ひじやま}橋^{はし}の南^{みなみ}。浅野^{あさの}の図書館^{としよかん}に行^いっていた、康^{やす}子^こちゃんと葉子^{ようこ}ちゃんの姿^{すがた}はありませんでした。

葉子ちゃんのお姉さまに会い、借りて
いた本を返して、オイオイと泣きました。
一緒に登校していた玉ちゃんも、亡く
なりました。

死にかけていた私が助かり、仲良しの
友達をすべて失い、親も亡くなり一人
ぼっちになりました。

辛い時、悲しい時、昔習ったオールド
ブラックジョーを口ずさみながら泣いて
います。

戦いのない、核のない平和で穏やかな
世の中が続くことを祈りながら、筆を
置きましょう。



広島県食糧営団比治山食糧倉庫の電車通りを挟んで
向かいにあった桐木町の消防施設

(米国戦略爆撃調査団撮影／米国国立公文書館提供)

私の一生で一番不安だったこと

山崎 時江（九十六歳）



被爆地……打越町（爆心地より一・八km）

当時の急性症状……下痢、脱毛

家族の死亡……なし

現在の症状……脂質異常症

被爆時の状況及びその後の生活

あの頃、私は二十歳過ぎで、母校の学徒動員の付き添いとして、呉市の吉浦の宿所から呉工廠に通う日々でした。

付き添いの交代日は六日でしたが、五日の夕方に代理の付き添いが来てくださったので、私は五日の夜に広島市打越町の姉の家まで帰ってきました。

再婚間もない姉の家でしたけど、いろいろな雑談で肩の荷も下りる夜でした。

朝食後、久久ひさびさだからお寿司すしを作つてやるとの計はからいで、私は隣となりの分家ぶんけに寿司桶すしおけを借りに、勝手口かっぺぐちへ行きました。

初めての家で、どんな造りになつていたのか記憶きおくにないのですが、「ピカッ」と異様いような光りで「ドキッ」として、驚おどろきと不安でどうすることもできず、「ドーン」と爆弾ばくだんの裂ける音というのでしょうか、異様いような風が吹ふいてきてガラスは割われる、がたがた倒れる、打たって変わかわつてこの世とは思おもえぬ騒動そうどうになりました。

幸さいわい大きな怪我けがはなく、兄も姉も私も動おどきました。これは大事おおごとに



打越町から南南東を望む

右端には防空壕、その奥に住野工業の煙突と爆風によって壁面と屋根のはぎとられた住野工業、中央付近に鉄骨アーチの横川橋が見える。

(米国戦略爆撃調査団撮影／米国国立公文書館提供)

なった、こんな所に私はおれない、早く帰らせてということになり、取るものも取りあえず無我夢中^{むがむちゅう}で私の生家^{せい家}、山県^{やまがた}の新庄^{しんじょう}へ向かいました。

苦しいだけでしたけど、命がけでしたからあの道が越せたのだと思います。疲れ果てた時、私にはどこかわかりませんがトラックに拾^{ひろ}われて、その日の夕方に新庄^{しんじょう}に着きました。

帰った安心と疲れ^{つか}で、翌日^{よくじつ}から下痢^{げり}がひどく動けませんでした。祖母^{そぼ}が薬草^{やくそう}を煎^{せん}じてくれたのが、唯一^{ゆいいつ}の薬^{いす}だったように思います。無我夢中^{むがむちゅう}だったので気付きませんでした。手、足、顔が傷^{きず}だらけで、皮膚^{ひふ}も油^ぬを塗るより他に^{ほか}なく、不幸^{ふこう}はつるばかりでした。快復^{かいふく}には二か月近くかかったと思います。

人間に生まれた以上、平和な日々^{ひび}を送りたいです。人生に夢^{ゆめ}のない人はおりません。突然断^{とつぜん}ち切^きって命^{いのち}を奪^{うば}われる戦争。体が震^{ふる}えます。心から平和な日々^{ひび}の続くことを祈ります。

